


「フィンランドという仕組み」

拝復

あいも変わらず二週間のご無沙汰でした。今年もすでに11月。あっという間に年末年始、ということに

なります。この原稿を書いている段階では、日経平均がバブル後  最安値の水準をいとも簡単にぶち破ったり、どこまでいくのか、と思えば8000円台を回復したり。視界が極めて不良です。ま、そうは言っても日々の生活は変わらず続くわけで、私もわずかな額ではありますが、それなりに損害を被っておりますが、そんなことは忘れて仕事をしましょう（笑）。

二号ほど前の [News Letter](#) で取り上げましたが、**不思議の国々、「北欧」**。何人が住んでいて何語を話しているのかなどまったくわからないのですが、**近頃**の**国家ランキング**（一人当たり**GDP**、**幸福度**、**居行くレベル**など）を見ると、**やたらに北欧の国が出てきます**。ベルギー、フィンランド、スウェーデン、ノルウェーが**狭義の意味での「北欧」**にあたります。アマゾンやウィキペディアで探してもこれといってばっちり、などというものにぶち当たりません。やっぱり遠くてよくわからない国です。今回は、「フ



←後半のフィンランドの文化の紹介も面白いですよ

ィンランド 豊かさのメソッド」堀内都喜子著 集英社新書 700円（税別）にガイドをお願いすることにします。堀内さん自身のフィンランドへの留学で体験した様々なことを記しています。

アイスランドの国家破綻危機など北欧の国々でも大変にクリティカルな状況になっておりますが、こちらはブログに任せるとして、早速、皆さんを北欧フィンランドご案内申し上げます。

フィンランド、地理の授業で習いましたよね。私も、大体あの辺、ということはわかるのですが、首都



がストックホルムで**ノキア**の本社がある、という以外に知識はゼロです。フィンランドの面積はおよそ九州くらいの面積。ここに**500万人**の人々が暮らしています。人口密度にすると一平方キロメートルあたり**17人**、日本の**1/20**です。もっとも北部の地域は極地圏に属しており、人口のほとんどは南部に集中しています。国土の**80%**は森林、**10%**は湖という風景に恵まれた国です。緯度の割には温暖な気候で（とはいえ真冬にはマイナス**30度**の世界になることもある）、夏には太陽はほとんど出ずっぱり、一方

本当に「森と泉に囲まれた」生活のようです（笑）→



冬場は日照時間が一時間という、やっぱり極地に近い国です。

公用語はフィンランド語、この言葉が非常に厄介。なぜならラテン語→英語圏というヨーロッパの言語とはまったく異なる言葉だからです。ゆえに外国人には習得はきわめて難しく、大学での授業は英語で行われることが多い（留学生がいるのと、ほとんどのフィンランドの学生は英語を話せます）。

そのフィンランドが最近脚光を浴びることになりました。「**国際競争力ランキング**」で**2001～2006年まで6回続けて世界でトップになったのです**。このランキングは、基礎経済、行政のクリーンさ、技術革新への取り組み、教育レベルを指数化し、持続的な成長を可能にする中長期的な競争力を指標化したものです。

フィンランドが高く評価されたのはまず、教育。そして国家財政の管理、政治が極めてクリーンであることだという。これらに加えて研究開発投資など技術革新への潜在力や、携帯電話の普及率、高齢化社会対策などが評価の対象となっています。ただし、税金は高い。ベラボーに高い。

確かにフィンランド人はまじめに働く、ただし一日の労働時間は**7時間30分**で、残業はほとんどしない。フィンランドではさらに**夏季には4週間以上のバカンスを取ることが権利**で



←4週間も休んだら社会復帰できない、と言う風に発想するのが日本人(T_T)。

あり、また企業には義務として課せられています。

現在は順調に見えるフィンランドですが、**1990年代に通貨危機に襲われています**。**1993年には失業率が20%を越えるような時期もあった**という。不況克服のために特に重視されたのは教育分野であったという。**人口がわずか500万人しかいない国では、一人ひとりのビジネスマンとしての資質を鍛えることが国策にマッチ**すると判断した。また、この時に今後のビジョンとして「IT先進国」においたことが今日の国の繁栄につながっている。どこかの国の政治家に聞かせてやりたい、お話ですね。

この結果、「ノキア」を筆頭としたハイテク企業が次々に世界マーケットを席卷することになります。

教育については、義務教育は日本と同じ**小学校6年、中学校3年**。一クラスにだいたい**20人**が平均的な数字。基本的に、高校までは誰でも入ることができる。私学がないために学校による差がほとんどなく、受験勉強とは無縁の生活。ただし、高校進学率などは日本よりもかなり低い。**高校・大学は勉強をしたい人が行くところ**であって、自分がやりたいことがはっきりしている生徒は、専門学校へ進学する。ここで注意が必要なのは、**日本のように「大学卒」>「専門学校卒」「高校卒」というような考え方はまったくない**。むしろ早い時期から専門的な教育を受ける専門学校生のほうが就職に関しては有利であ

ることさえある。高校に関しても、日常的なテストは一切ない。卒業のためには全国レベルで催される「卒業試験」に合格をすることが必要である。その成績によって行ける大学はある程度限られるようです。

毎日に関しては、宿題は出るようだが、量は多くない。高校受験もなし、こんなことでなぜ教育立国を名乗るような人材が育つのだろうか？私学はないし、塾もない、家庭教師もない。この本を読み進めていくうちに二つの決定的な違いがあることに気が付いた。「**教員の資質**」と「**教育の中身**」である。

まず、教員の資質であるが、**教員になることが非常に難しい**。大学で教職課程をとって、教員採用試験に合格すれば、即「先生」になってしまう日本とは雲泥の差といってもよい。フィンランドでは小中、高校の教師はほとんどが「**修士号**」を持っている。また、自分の専攻以外に、「教職課程」を取得しなければ教員になることはできない。この「教職課程」を受験することがすでに難しい。修士論文以外の専門科目をほぼ終了していることが求められる。ペーパーテストに運よく合格すると、今度は個別面接、ディベート、と非常に厳しい関門が待っている。最低限の専門知識だけではなく、人柄、周りとうまくやって行けるか、等の「**人間力**」を試される。そして運よく面接に合格したとしても教員に必要な知識や体験のみを一年間のカリキュラムとする「教職課程」が待っている。フィンランドでは伝統的に「教員」の志望者が多く、また、尊敬を受ける職業のひとつである。こうした厳しい選別を潜り抜けたものが始めて教壇に立つことを許されるのだ。決定的な違いの一つ目は、「**教員の資質**」である。「**でも、しか先生**」とはレベルが違う(**日本の教員の社会人としての無能力さは息子の学校で実感しました(T_T)**)。

二番目のポイントは、教育の内容である。日本の教育はほぼ一貫して、「知識詰め込み型」の教育である。



「**いい国作ろう鎌倉幕府**」という知識は試験にいい点を取る以外に何の役にも立たない。

対照的にフィンランドでは「**教え育む**」という基本的な考え方があり、「**教育で大事なことは情報を与えるだけではない。自分で考える力、問題発見能力、問題解決能力、想像力、理解力、適応力を養うことである**」この言葉は教育大臣の言葉である。フィンランドの試験は、穴埋め式や選択肢式の問題はない。何々について述べよ、という記述式である。過去に [NewsLetter026 号](#) で紹介したボーディングスクールと似ている

また 2001 年からは「ルク・スオミ」という教育キャンペーンが行われている。小中学生、高校生の読解力を高め、文学の知識を増やそうという試み。クラスの担任、大学の教員、地域、自治体を巻き込んだの



キャンペーン。ここまで読み進むと、杉並区の「和田中」において藤原校長（リクルート出身）がとった政策である「**地域に開かれた中学校**」と非常によく似ていることに気が付く。

フィンランドの教育が非常に高いレベルで実現されているのと同時に、世界的な企業をいくつも作っている力の源は、**語学力**である。ほとんどの国民が英語を話すことができる。小学校 2 年生から必須科目

として取り入れられる。前述したように言語のルーツが全く違うためにその習得は決して楽ではないはずだが。周囲の人がみんな話せるという「常識」、もうひとつユニークなのは、テレビで英語圏の番組がたくさん流れているらしいのだが、吹き替えがない。テロップだけ。毎日の生活の中で日ごろから慣れ親しんだ言葉としての英語力が育まれていく。

教育を後押しするのが金銭面でのサポートである。授業料は一切かからない(!)。高校→専門学校→大学というコースをとるものも多いため、大学入学時の平均年齢は23歳(!)である。また、社会人として働きながら大学に通うことが可能で、4年で卒業するもよし、必要な単位さえ取得していれば、何年かかろうがお構いなしである。

また生活費についても学生であれば500ユーロが毎月支給される。これは一切の返済義務がない(!)。学生に対して、学問に対し非常に手厚い国、それがフィンランドである。

また、国の子育て支援が充実している。手当て(毎月300ユーロ)のほか、日本で言う保育園がほぼ100%完備している。現在のフィンランドの合計特殊出生率は1.8。1980年代には日本同様低下することがあったようだが、人口の維持に必要な2.1に向かって国を挙げて応援をしている。こうした手厚い仕組みのおかげで女性は出産をしてもすぐに職場復帰する。小学生の母親の80%はフルタイムで働いておりパートタイムを入れると95%は職についている。



同時にフィンランドは「**超高齢化社会**」である。2010年には60歳以上の人口が30%を超える。EUの中では移民も少ない。これに対して政府が取っている政策は、「**年金の改革**」「**再訓練などの能力向上**」「**労働条件の緩和**」を三つの柱として60歳を超えても普通に働ける社会を目指している。労働力の確保のために国を挙げて取り組んでいるのが、「60歳以上の人の労働力化」と「女性の労働力化」の二つである。

まだまだ書きたいことはたくさんあるのだが、私が今回、フィンランドを取り上げたかったのは、この国のあり方が、これからの日本の目指すべきベクトルときわめて参考になると考えたからである。「安心して子供を産める社会」、「教育への熱心な取り組みと同時に手厚いサポート」、「高齢者の労働力化」など。今からでも遅くはない、この「一人ひとりの資質」を大切にして社会全体の仕組みを通じて、人材育成に取り組む姿勢。時間はかかるが、社会全体を単なる利潤追求型の社会から、痛みはあるが「前途が明るい」社会へと変貌させることがひとつの道であると考えます。脱近代化社会のあり方として非常に優れたモデルそれがフィンランドである。**ただし税金は高いですよ^^ ; (ざっと50%)**。

株式会社アール・リサーチ 〒271-0051 千葉県松戸市馬橋 1896-1 ヴィレッジ K・I 馬橋 3F

Tel 047-342-3181 mobile 090-7428-8999 mail : ryubon@kkd.biglobe.ne.jp

<http://r-research.co.jp/> ブログ、毎日更新しています→<http://rresearch.blog103.fc2.com/>